

調査日 群馬県森林組合共販所 6月1日

6月に入り梅雨もたけなわとなり、寒暖の差が激しい。
前橋の市況は、スギ・ヒノキ共に4.0mが良く売れている。出荷量が3.0m・4.0m共にさほど多くはないにしても、3.0m材に応札無しの物件が見える反面、4.0m材は良く売れている。
大径木は、前回からの不落物件が、少し値を下げて、完売した物だが、小角用の10~18cm及び、中目材の20~28cm辺りは、量が少ないとは言え、少し値が良く、応札枚数も複数枚見られる所から、需要が有ると観られる。
柱材の本流が、大型工場につながっている今は、4.0mの角材用と中目材は貫などの板材用が求められているのかも知れない。
特にヒノキの土台角用 16cm~20cm位だと思いが、この辺りはひっ迫している様だ。今回の11号物件については、20,000円の値が付いている。
4.0mの14cm、1目の物件だが、通直であったろうと思うが、買方がトーセン製材である。栃木県の大田原市の会社だが、ご存知の通り”群馬県産材加工協同組合”の母体となっている会社で、入札するのは県産材加工協同組合の専務の東泉氏である。昔から「出し渋り」であったが、今回は特別な事情が有った様である。とは言え、大きな製材工場が積極的に買ったことは、頭の隅に留めておく価値はありそうだ。

調査日 素材生産協同組合 6月16日

今回は”あやめまつり市”と銘打って行われた。
これといった目玉商品は無かったように思うが、今回は国有林からの出荷が、あった。少量なので、どういった経緯か判らないが、素生協から「何か、目玉になる物を」と依頼したかもしれない。
気になったのが、県森連の共販所でも目立ったトーセン製材の動きである。加工協同組合としては、3.0mの柱材しか買わないが、それは鬼石の工場がそれしか挽けないからだが、トーセン製材は大田原市を中心に複数の工場を持っていて、工場ごとに専門分野を決めて稼働している。
最近3.0mでも4.0mでも細い物を買っている。何か新しい事業を始めたのかも知れないが、東泉氏も忙しい人で、なかなか会う事が出来ない。
変わったものと言えば、”黒柿”が2本出品されていた。数人の買い方が集まって目利きをしていたが、造材が使い道を考えないで伐っているので、評価が定まらない。元口の方に柿渋で黒く染まった文様が表れているが、末口には見えない。建築材料になるとは限らないので、3.0mにこだわることはない。言うなれば、魚市場でマグロの尾を切って切り口で脂の乗り方を判断するのと同じであるが、この場合その判断が出来ない。
末口近くまで黒いのか、元口からすぐに消えてしまうかと推測しかない。。この場合「これは見事だ。」とか「結構使えるのでは？」と言う事を口にする人は買う気が無い。真剣に木肌を見て「ここまでしか色が入っていない」と厳しい判断をする人は、買う気マンマンなのだ。そういう人に末口に色が出ている所まで伐り戻して、両側に模様を見せてやれば、使い道も決まるし、高値になる。

市に行って、黙って買い方同士の話に耳を傾ける。ちょっと質問などを入れながら、市の始まりから皆が帰るまで、聞き倒すのも、良い勉強になる。皆、工夫して買って行った丸太を使っている。
最近では、県の県産材に対する優遇措置が無くなってくると、大手のハウスメーカー以外は家が小さくなっている。こんな時「県の優遇措置が無いなら4寸角の柱を使う必用が無い。小さな家は狭くなってしまうから3.5寸柱が良い」と言う流れもある様だ、柱が4.0寸から3.5寸になると、それに伴い桁の平角の厚みも、間柱の幅もすべての材がダウンサイズになる、由々しき問題だ。また、あまり売れないヒノキの大径木（大節だらけ）の様な物を買って行って、今は入手困難な米松の桁の代わりに使っている

人もいる。もちろん設計士さんとお施主さんの理解が必要だが、「無垢のヒノキを使ってはいかが？」という提案には施主さんは快諾し、設計士は苦い顔をするそうだ。提供する材木屋さんによって、木材の狂いが大きく違うからだ。

ちなみに、黒柿だが、私が現役時代に、渡良瀬森林組合から3.0m材に交じって末口26cm・長さ2.7mの曲がった泥だらけの丸太が混じってきたことがある。危うく、槿の敷棒になる所で、「もしや」と思って「これは捨てるな！」と指示して木口を洗って見ると、見事な黒柿だった。

1本単価で売った所。85,000円/本の値が付いた事もある。m³にして、
実に、465,720円/m³である。

高価な物なので、わたらせの森林組合へ落札の許可を求めるべく電話をすると最初は「何の話ですか？」と言う事だったので、訳を話したら、驚いていました